

四方田犬彦

比較文学 映画史

1 宇波彰『ラカンの思考』(作品社)

2 李英載『トランス／ナシヨナルアクション映画——冷戦期東アジアの男性身体・暴力・マーケティング』(東京大学出版会)

3 安彦良和、斉藤光政『原点 THE ORIGIN——戦争を描く、人間を描く』(岩波書店)

1は凡百のラカン解説書やラカン応用問題集ではなく、ラカンの語彙を契機として自由に発想された言説である。著者が以前から唱えていた思考のシニフィアンの連鎖の好例ではないか。高齢にしてかくも自由闊達な精神に羨望を感じない人はいないだろう。

2は日本統治下の朝鮮映画

が、今年になって読んだ本といたことで選択。この本は一度昭和20年代に早川書房で邦訳刊行されたと伝わるのだが、古書ミステリを漁っていた時分も、ついにその現物を目にするにはなかった。海外ミステリの翻訳書としてはかねて下の探されていた稀書だけに、邦訳刊行が慶ばれる。フリーマンは、アカサ・クリスティの10年以上早くにデビューし、ミステリの歴史ではおそらで最初の、ミステリ

について画期的な研究を行なった韓国の映画史家の新著。東アジアのアクション映画論だが、日本で同じテーマで語る人間は、オタク情報と恣意的な嗜好の次元を越えることができない。韓国では歴史的批判意識の筋の通った本となる。この違いは何か？

3は、このところ3巻本の1968文化アークイウの編集に忙殺されているわたしにとって、大いに刺激を受けた回想記録。なるほど、こういうわけだったのかという気持ち。弘前大学中退の著者は、同じ弘大の青砥幹夫、植垣康博(いずれも元連合赤軍兵士)の訳書きを進めていると知った。ぜひ刊行してもらいたいと思う。

天笠啓祐

ジャーナリスト

ジョレス・メドヴェージェフ

・金岡秀友『古代インド哲学史概説』(佼成出版社)

インドの思想史の枠組は、日本の研究者では大体において中村元とその人脈にたつたものがスタンダードを形成した観がある。中村元が偉大な仕事を残したのは疑いがないが、その視点や枠組は疑われ、新たな提起がなされるべきものでもある。その二石を投じる『インド思想史の書物』

『ワラルの核惨事』ジョレス・メドヴェージェフ、ロイ・メドヴェージェフ選集第2巻(佐々木洋解題・監修、名越陽子訳、現代思潮新社)は、1957年にソ連で起きた、チェルノブイリや福島原発事故にも匹敵する大惨事でありながら、政権によって隠された事故を暴いたドキュメントである。以前、同じ本が技術と人間社から刊行されたが、今回はロシア語から翻訳され、しかもその後に発表された公式見解を批判し、福島原発事故にも言及して、充実した内容になっている。

福島第一原発事故については、ルーシー・バミンガム／デイヴィッド・マクニール『雨ニモマケズ——外国人記者が伝えた東日本大震災』(PARC自主読書会訳訳グループ訳、えいし書房)が充実している。震災直後に二人の外

国記者が書いた本で、手分けして取材し6人の被災者のそれぞれ異なる体験を軸に、被災の時からその後の生き様を追いかけている。原文にはなかった日本語版へのあとがきが書き加えられ、6人のその後が伝えられている。私たちが日本人への鋭い問いかけが印象的である。

小森健太郎

ミステリ作家

現政権は政治的手法も強引だが、同時に規制緩和や技術開発、経済政策も強引である。科学技術の分野では、イノベーション一辺倒である。その最前線にあるのが、バイオテクノロジーで、その目玉となっているのが、iPS細胞やゲノム編集、RNA干渉といった最先線の分野である。石井哲也『ヒトの遺伝子改変はどこまで許されるのか——ゲノム編集の光と影』(イースト新書)は、最先端のバイオテクノロジーがもたらしているものについて、何かに引

つかるものがあるという問いかけから始まり、どこまで遺伝子を操作することは許されるのか、あるいはどこから許されないかを、研究者はもちろん、市民もまた否応なく迫られる時代が来ていることを語っている。

二〇一七年上半年期

者が、全共闘時代の体験などをラッタビュリした新聞連載「ガンダム作家が見た戦争」をもとに大幅加筆した著作だが、安彦のまさに思想の原点に迫る画期的な一冊である。

塚原史

フランス文学 現代思想

表象文化や現代思想の分野から今年上半期の三冊を選ぶとすれば、まずミシェル・テブオー『アール・ブリュット』(白水社)が、

野上皓

天折した童謡詩人・金子みすゞの弟雅輔の未公開資料などを駆使して、彼女を恋人のように慕い徐々に影響を与えあつた弟との曲折した交流が、童謡文学昂揚期から戦争